

木 里 海 NEWS LETTER No. 3

CoHHO (こっほ) = Connectivity of Hills, Humans and Oceans (森里海連環)

教育プログラムの2年目をむかえて

前号のNEWS LETTERでお伝えしたとおり、2014年3月24日の教育プログラム第1回修了式では、26名が本教育プログラムを修了しました。修了証には、“Nature & Humanity Coordinator”と書かれています。これからも多くの学生が、自然と人のつながりを生み出していく人材として、多様な知識を得、さまざまな分野でのネットワークを構築していってくれることを願っています。修了式では「森里海連環学教育プログラム同窓会」の設立宣言がなされ、教育プログラムを修了し社会に出た後も、履修生同士がつながりを保っていくための基盤ができました。教育プログラム開講2年目を迎え、修了生、継続履修生そして新たな履修生同士の専門分野を超えた交流が進められています。

Event calendar 2014 April - October

4月	8	学際融合教育研究推進センター「学内プログラム合同説明会」	
	9	森里海連環学教育プログラムガイダンス	Event report 1
	14	プログラム履修願提出期限	
5月	7	「森里海国際貢献学」(必修)ガイダンス	
	29	森里海連環学公開講座： Edouard Lavergne Alexandre (森里海連環学教育ユニット特定講師)	Event report 2
6月	11	インターンシップ補助金ガイダンス	
	20	「森里海連環の理論と実践」(実習)ガイダンス・講義	
7月	4	インターンシップ補助金・国際学会発表補助金, 一次締切	
	12・13	「森里海連環の理論と実践」(実習)を近江八幡市にて実施	Event report 3
	15	インターンシップ補助金・国際学会発表補助金, 二次募集(10/31 締切)	
	18	「森里海連環の理論と実践」(実習)の成果発表会	Event report 4
		順次インターンシップへ→Weekly reportが内部向け掲示板で報告されています	
8月	7	(全学対象)森里海連環学実習Ⅰ(京都府・由良川流域)	
	30	(全学対象)森里海連環学実習Ⅱ(北海道・別寒別牛川流域)	Event report 5
9月	3	DIPCON Asian Regional Conference in 2014	
	4	森里海連環学公開講座：駱 尚廉(国立台湾大学教授)	Event report 2
	27	国際シンポジウム&ワークショップ in ベトナム	Event report 6

Event report 1 森里海連環学教育プログラムガイダンス

2014年4月9日、森里海連環学教育プログラムの履修生向けガイダンスが開催されました。前年度から継続して履修する学生45名に加えて54名が新たに加わり、99名の履修生を迎えて、今年度の本教育プログラムがスタートしました。

京都大学のすべての大学院生を対象としている本教育プログラムには、前年度と合わせて9つの研究科に所属する大学院生が履修することになりました。また、必修科目のひとつである『森里海国際貢献学』（英語による発表・討論を中心としたテーマ別ゼミ）の履修者を対象としたガイダンスも5月に行われ、森里海連環学教育ユニットの教員がそれぞれ主催する4つのグループに分かれて、ゼミ形式の講義が実施されることになりました（→各グループの様態を本号と次号で紹介します）。

Event report 2 森里海連環学公開講座

森里海連環学教育ユニットでは、森里海連環学に関する公開講座を開催しています。教員・学生を問わず、一般の方にも参加していただけます。不定期ですので、ユニットのホームページ（<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/cohho/>）のNewsを要チェック！

2014年4～9月の森里海連環学公開講座の報告者・タイトル

1. Edouard Lavergne Alexandre (森里海連環学教育ユニット特定講師) : Estuarine fish biodiversity of Socotra (Part1), Hot days for a flat fish (Part2)
2. 駱 尚廉 (国立台湾大学教授) : Data Mining in Environmental Informatics - Applications of Self Organizing Map(SOM)

Event report 3 森里海連環の理論と実践 —実習編—

森里海連環の学問を実際に体験し学んでもらうために、教育プログラムの選択科目の「森」分野では、今年度、「森里海連環の理論と実践」を開講しました。3回の座学講義で理論を学び、1泊2日の見学・実習を近江八幡市の森・里・海（湖）のフィールドを通して行いました。実習先は、八幡山の「森」、近江商人の「里」、琵琶湖の「海（淡海とも呼ばれている）」の3つの条件が揃う滋賀県近江八幡市です。

実習① 近江八幡のまち歩き

実習の一日目は快晴でした。学生14名を乗せたバスが京都大学から出発し、時間通りに日牟禮八幡宮に到着しました。地元のみちづくり会社「まっせ」の田口さんの引率で八幡堀と近江八幡の伝統建築保全地区を案内していただきました。八幡堀沿いや新町通り、永原町通りは、白壁になまこ塀や舟板塀を張りめぐらせた商人屋敷が残されており、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。まち歩きの後に、空き家を整備して「まっせ」の事務所として利用されている奥村邸に移動し、そこで近江八幡の住民主体型まちづくりと住民主体型環境改善事業の話をうかがいました。



まち歩き（商人屋敷）



奥村邸での田口さんによるレクチャー

実習のスケジュール		
日	時間	内容
7月12日 (土)	8:45	京大農学部グラウンド前に集合
	9:00	バス 出発
	10:30	日牟禮八幡宮に到着
		実習①近江八幡のまち歩き
	12:00	昼食
	13:00	実習②：水郷めぐり、水質調査
	16:00	竹林実習の説明、竹林の下見
7月13日 (日)	18:00	交流会
	8:00	朝食
	9:00	実習③：竹林の整備・伐採
	12:00	昼食
	13:00	実習④：竹の資源利用
	15:00	安土山 見学
	16:00	安土山 出発
	17:30	京大 到着、解散

実習② 水郷めぐり・水質調査

昼ごはんは近江八幡の名物近江牛のカレーライスを美味しくいただき、実習のスケジュールは八幡堀川・西の湖の水郷めぐりと水質調査に移ります。

近江八幡のまち歩きでは、「里」の中で人々の営みを身近な視点で観察することができました。近江八幡の水郷めぐりでは、自然と融合した文化的景観を見ることで、森里海連環学の視点から景観と生態系の保全の繋がりを考えるきっかけを作り、体験することを目的としました。

まずは昼食場所から徒歩で観測ステーション（Sta.1）に向かいました。河岸から八幡堀（川）の水深や水温、電気伝導度などを計測し、後で分析するためのサンプル採集をしました。そして、舟乗り場から手漕ぎ和舟に乗り、水郷地帯を巡りました。手漕ぎ和船は、湖に生息する生き物たちに最も負担が少ない乗り物です。舟乗り場から八幡堀川～北之庄沢を通り西の湖を経て一周するコースを、4艘に分かれて、ほぼ2時間かけて回りました。コースの中では、舟を漕ぎながら、船頭さんが近江八幡の水郷地帯の今昔について話してくれました。ほぼ毎日のようにお客さんを連れて水郷地帯を巡っている船頭さんの呼びかけに応じて、野鳥が近くまで寄ってきました。参加学生の中には、船頭さんの指導を受けて舟を漕ぐ体験をした人もいたようです。

水郷めぐりの中では、7カ所の観測ステーションで、Sta.1と同様に舟の上から水深や水温、電気伝導度などの計測・サンプル採集を行いました。



Sta.1での観測・採水作業の様子



水郷めぐりと観測・採水

水郷めぐり・水質調査のコース
(八幡堀川～北之庄沢～西の湖)

- 舟乗り場
- 観測ステーション



舟を降りた後、採水したサンプルを持って、「ラ・コリーナ近江八幡」に行き、簡易パックテストを用いて分析しました。その結果、窒素やリンなどの栄養塩は八幡堀より水郷地帯で低いものの、COD（化学的酸素要求量：有機物量の指標）は水郷地帯で高くなっていました。湿地帯は水質を浄化しているという期待した証拠は得られず、単純なものではないことがわかりました。学生の中には水質分析を専門としている人もいましたが、日頃そのような作業になれていない学生にとって、分析をして結果を解析するというプロセスは新鮮なものようでした。

実は、たねやグループが八幡山の麓に建設中の「ラ・コリーナ近江八幡」には、森里海連環学のための教育・研究拠点があります。今回の実習では、施設の利用についてもたねやさんにたくさんお世話になりました。というのも…（つづく）



簡易パックテストによる水質分析



「ラ・コリーナ近江八幡」内の教育・研究拠点

夕食後の交流会

水の分析で一日の行程を終え、宿舎の近江八幡ユースホステルに向かいました。宿泊先は、築 100 年以上の明治建造物です。ここで夕食をいただいた後、ラ・コリーナにて、たねやさんが交流会を用意してくださいました。沢山の美味しいおつまみとお酒をいただきながら、たねやのスタッフの方々や近隣で活動されている環境保全団体の方と交流しました。たねやグループ CEO の山本昌仁さんも会場にかけつけてくださり、近江八幡の森里海をめぐる熱い思いを語ってくださいました。学生たちにも、竹林や周辺環境の整備にかけるスタッフの日頃の情熱がしみじみと感じられたようです。明日の竹林整備、頑張りましょう！



山本 CEO を囲んで交流会

実習③ 竹林の整備・伐採

実習 2 日目は、あいにく朝から雨がぽつぽつと降ってきました。それでも昨夜のたねやさんの熱い思いに応えるために、学生は皆、雨にも負けず、雨靴・レインコートに着替え、ヘルメットを着用して竹の伐採に挑みました。

竹林整備の場所はラ・コリーナの近くにある竹林です。管理の行き届かない（適切な間伐がなされていない）竹林は、他の樹木の生長を阻害し、生物多様性や森の水源かん養機能にも影響を与え、土砂災害や土壌崩壊を引き起こす可能性があると言われています。また、薄暗く奥まで見通せないため、多くのゴミが捨てられていることが中に入るとよくわかりました。

学生たちは、柴田昌三教授（地球環境学堂）やたねやのスタッフから伐採の方法の指導を受け、すぐに実践を始めました。班ごとの共同作業によって、密生していた竹はどんどん伐り倒され、林の外に搬出されました。途中から雨が土砂降りになりましたが、既にコツを掴んだ学生たちはやる気がどんどん膨らみ、どんどん竹を伐り続けました。伐採作業を終え、みんなの顔に映っているのは達成感満載の笑顔でした。



竹の伐採



切り倒した竹の搬出

実習④ 竹林資源利用

伐採した竹をラ・コリーナに運び、資源として利用する実習です。まずは、竹を建築資材として活用するため、金具を使って竹を割り、割った竹の節を取る作業をしました。細長く平らになった竹材を利用し、小林広英准教授（地球環境学堂）の指導の下で竹の温室（バンブーグリーンハウス）を組み立て

ました。他にも、竹をチップperにかけ、粉々になったチップを土の上に敷き、雑草の発生を抑制する利用方法があります。雨天のため、歩道に敷き込む作業ができませんでしたが、たねやのスタッフの方にチップperでの破碎の様子を見せてもらいました。

作業を終え、昼食をとった後は、報告会の準備のため、3つのグループに分かれて話し合いを行いました。この2日間の中で、実際に見たり、体験したり、作業を行ったりしたことを踏まえ、多様な専門分野を学ぶ学生が集まった各グループがどのような報告をするのか、とても楽しみです。



昔ながらの道具を使って竹を割る



バンブーグリーンハウスの組み立て



出発前に全員集合！



安土山は小雨模様で眺望は今ひとつ

安土山へ見学

実習のメインスケジュールを終え、ラ・コリーナに別れを告げて最後の目的地である安土山にバスで移動しました。安土山からは、近江八幡を一望することができます。

長い石段の登山道を登り、1時間あまりをかけてやっと頂上に辿りつきました。みんなで山頂から今回の実習で回った近江八幡の全貌を眺望し、柴田教授の説明を受けて実習のエンディングとなりました。

(教務補佐員 黄エンケイ)

「森里海連環の理論と実践」の実習が行われた翌週、事前に設定されていた課題について、3つのグループが報告を行いました。課題は、「近江八幡における森里海連環の実践について」で、たとえば、森里海（湖）連環に寄与する近江八幡の文化的景観を持続可能にするための提案、ヨシの利用、西の湖・八幡堀の水質の再生、地域資源の活用など。

各グループの自由な発想で、どのような実践が提案されたのでしょうか。

報告会には、近江八幡旧市街のまち歩きでお世話になった「まっせ」の田口さんや「たねや」の讃岐さん、三上さんが出席してくださいました。報告はグループC→B→Aの順で行いました。

グループCは、「BIWAKO 芸術祭 (ART BIWAKO)」。

既存の芸術祭の取り組みに新しいアイデアを加えるもので、近江八幡旧市街から西の湖をはさんで安土山までのサイクリングロード沿いに地域産品の出店やアート作品を配置するという提案でした。地元の若者が積極的に参加できる体験型ワークショップなどのアイデアも出ました。

グループBは、「近江八幡学生インターン」。

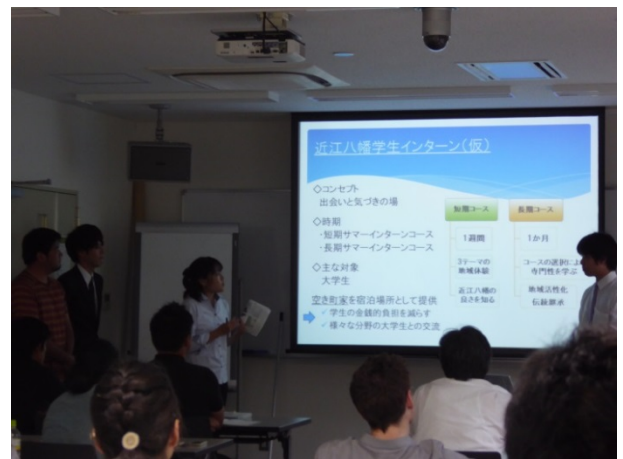
近江八幡の多様な資源・産業を知る短期・長期のインターンシップを通して「出会いと気づきの場」を提供し、地域振興の即戦力を育成することができるというものです。「おうみはちマン認定証」というユニークなネーミングも提案されました。

グループAは、地域新聞「近江八幡森里海新聞」です。実習の様様を紙面に配した資料が配られ、具体的なイメージが伝わってきました。発信形態や運営資金（フリーペーパーではなく、新聞）や他のメディアとの関連性について意見が出ました。出席者からは、近江八幡の自然や建物だけでなく、森・里・海（湖）で働く人にもフォーカスしてほしいという意見がでました。実習から報告までの期間が短く、グループ作業はハードだったようですが、今回のアイデアをさらに実践に結びつけられるような継続的なテーマをもった実習にしていきたいと考えています。

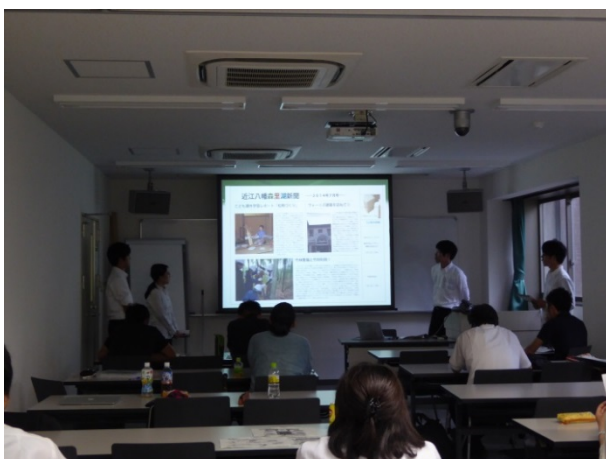
(清水夏樹)



グループC：ART BIWAKO



グループB：近江八幡学生インターン



グループA：「近江八幡森里海新聞」



具体的な方法や継続性について質問も

今年度も、京都府の由良川流域（実習Ⅰ）と北海道の別寒辺牛川流域（実習Ⅱ）において、全学共通科目である森里海連環学実習が行われました。これらの実習では、森～河川～河口・沿岸～海を通して調査を行い、生態系構造の変化を解析することによって森里海の連環について考察することを目的としています。

京都府・由良川流域（森里海連環学実習Ⅰ）

8月7日から11日に行われた実習Ⅰ（通称：由良川実習）では、学内（7名）と学外（9名）から1-4回生の学生が参加しました。今回は、高校時代に舞鶴水産実験所で実習を行った学生や昨年度に抽選でもれた学生が参加し、森里海連環学に対する興味が形になってきたという手応えを感じました。

例年は野外調査に2日半をかけるのですが、今回は台風の接近もあり、芦生研究林に到着した後、事務所脇の溪流で調査をし、すぐに由良川を下りました。初日は、上流側4地点目まで調査を行い、舞鶴水産実験所へと向かいました。2日目には、残りの下流側2地点で調査を行いましたが、由良川の出口に位置する神崎浜ではすでに波が高く調査を断念しました。以上の行程により、例年より1日早く調査が終了したため、結果的に、室内作業と発表準備にいつもより多くの時間を割くことになりました。

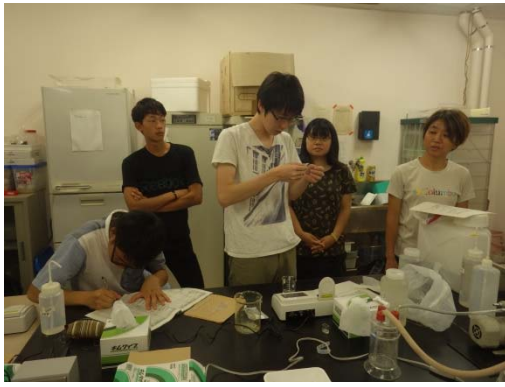
室内作業では、生物項目として魚類・水生昆虫・動物プランクトンおよび魚類の胃内容物の同定、水質項目として懸濁物と水試料の有機物・栄養塩等の分析を行いました。舞鶴水産実験所で恒例のバーベキューは雨天のために玄関先で行うしかなく、その代わりに舞鶴近海で獲れた魚介類の絶品お刺身で海の幸を満喫しました。

同定や分析の完了後は、個々の結果を入力してデータを共有化し、班ごとに発表の準備を行いました。各班は、それぞれ、水質・プランクトン・水生昆虫・魚類という与えられたテーマに沿って、夜遅くまで（翌朝早くまで？）作業を続けました。例年と比べて準備時間が長かったためか、各個人の作業と全員での議論が繰り返し行われ、とても興味深い発表に仕上がりました。短時間ではありますが、各々が森里海連環学について真剣に考えて、結論を形づけようとした姿勢は学生の適応力の高さを感じさせるものでした。



野外調査の様子

室内作業



集合写真

結局、実習期間に重なって上陸した台風は、一足早く舞鶴市の上空（！）を通過して日本海に抜けました。台風一過の青空のもと、全員で写真を撮って今年の実習は終了しました。今年度は残念ながら山での調査ができなかったのですが、逆に台風接近という貴重な経験ができたのではないかと思います。

（研究員 安佛かおり）

北海道・別寒辺牛川流域（森里海連環学実習Ⅱ）

8月30日から9月5日に、京都大学フィールド科学教育研究センター北海道研究林標茶区と北海道大学北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所を拠点として、全学共通科目の森里海連環学実習Ⅱを実施しました。この実習は北海道大学との共同実習で、1～2回生を中心に、京都大学から10名、北海道大学から10名の学生が参加しました。

【行程】

8月30日(土)	ガイダンス、安全教育、講義、樹木識別実習
8月31日(日)	天然林毎木調査、土壌調査、講義
9月1日(月)	パイロットフォレスト視察、牧草地土壌調査、水源域調査、講義
9月2日(火)	別寒辺牛川の水生生物・水質調査、講義、水質分析実習
9月3日(水)	厚岸湖および湾の水質・底質・水生生物調査、グループ発表準備
9月4日(木)	グループ発表（愛冠自然史博物館）、レポート作成
9月5日(金)	レポートの作成・提出

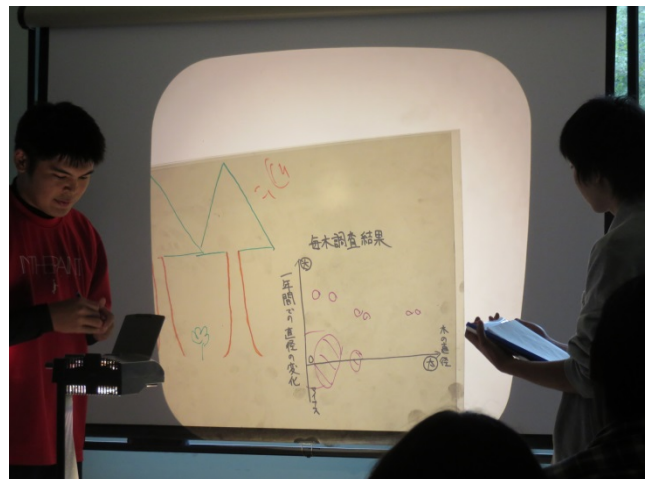
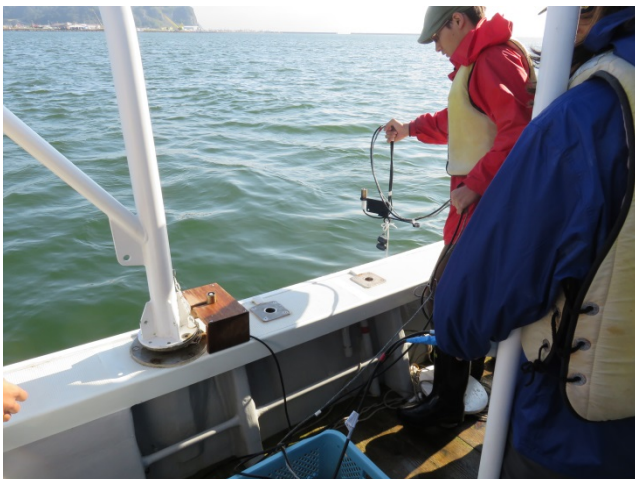
実習は、研究林標茶区での植生・土壌調査に始まり、別寒辺牛（ベカンベウシ）川を下りながら水生生物・水質調査を実施し、厚岸湖および厚岸湾での水質・底質・水生生物調査に終着します。日中は体を張って野外調査に挑みます。森では、図鑑とにらめっこしながら樹木を同定したり、深さ 1m ほどの穴を掘って土壌を観察したり。川や湖では、胴付長靴を履いて腰まで水に浸かりながら水生生物を捕獲したり。海では、船酔いと格闘しながら採水したり透明度を測ったり。クタクタになって宿舎に戻った後も、翌日の調査の予習やその日の調査結果の整理が待っています。

最終日は、厚岸臨海実験所が運営する愛冠（アイカップ）自然史博物館で、グループ発表・討論「別寒辺牛川流域の森里海連環学—森・川・海・人間活動の視点から」を実施しました。博物館への道中、愛冠岬で集合写真を撮ったり、エゾシカたちに遭遇したりしました。肝心の発表の方は、どの班も限られた時間の中で取りまとめようと努力していました。何よりも、今の時代にオーバー・ヘッド・プロジェクター（OHP）という古式ゆかしい道具を使った発表は特徴に溢れていました。

ちょっとハードな 1 週間を乗り切った学生たちは、どことなく逞しさを増したように見えました。初日のバスでは 1 人ひとり静かに座っていた彼らですが、その結束力と賑やかさは日に日に増し、最終日には抱き合って別れを惜しむ姿も見られました。学生の乗ったバスが見えなくなるまで見送っていた京大フィールド研吉岡センター長の姿も印象的でした。

いつになく個性豊かだった今年の学生たち…、いつかまたどこかで会える日を楽しみにしています。

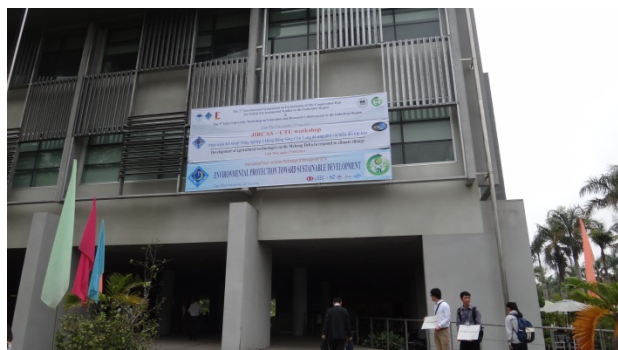
（研究員 長谷川路子）



Event report 6 ベトナム国際シンポジウム&ワークショップ

ベトナム・カントー市のカントー大学において、2014年9月27日、京都大学地球環境学堂のJSPS研究拠点形成事業の一つとして、第2回国際シンポジウム「インドシナ地域における地球環境学連携拠点の形成」および第9回「インドシナ地域の教育研究連携に関する大学間ワークショップ」が開催されました。

森里海連環学教育ユニットからは、教育プログラムの紹介、特定教員の吉積・清水のそれぞれの教育・研究分野における国際連携に関する研究成果を、ポスターセッションにて発表しました。また吉積は、「ベトナムにおける子どもの安全環境に資する地域コミュニティを持続可能にするESDプログラムの構築：フエ市・ダナン市を事例に」と題して口頭発表を行いました。

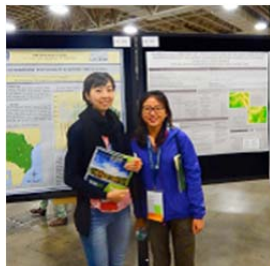


国際学会発表補助金を受けた履修生の学会発表

2014年度の第1回国際学会発表補助金では、6名の履修生が申請・採択され、国際学会にて発表を行いました。

発表者	発表学会名(場所)	発表タイトル(発表形態)
丸山 晃央	第26回国際鳥類学会議 (東京)	Development of automatic bird-species recognition system from birdsongs in tropical area (ポスター発表)
包 薩日娜	The Asian Conference on Sustainability, Energy and the Environment (大阪)	The adoption of Internet use in China metropolitan suburbs: A case study in Beijing suburban (口頭発表)
佐々木 孝子	2014 International Conference on Humanity and Social Sciences (フランス・パリ)	Revival of tradition in a Taiwanese aborigines' community by means of a community development process -from a perspective of agent/agency- (口頭発表)【ベストペーパー賞受賞】
董 楽	The 13th International Conference of Africanists "Society and politics in Africa: Traditional, Transitional, and New" (ロシア・モスクワ)	How to address the environmental and social risks of foreign official development finance (ODF) to Africa -Case study on the Chinese ODF in Lamu Port of Kenya (口頭発表)
Gou Shiwei	24th IUFRO World Congress, "Sustaining Forests, Sustaining People, The Role of Research" (米国・ソルトレイクシティ)	Assessing trail condition and users' perceptions on the impact problems for Nakahechi Route of the Kumano Pilgrimage Network in Japan's Kii Mountains (ポスター発表)
松本 京子	IWA World Water Congress & Exhibition (ポルトガル・リスボン)	Factors sustaining small-scale water supply cooperatives in communities in Japan (ポスター発表)

国際学会での発表を通して「国内外の研究者や様々な分野で活動をしている人々と新たな出会いを得ることができた」、「研究の方向性について有意義な・新鮮な質問・コメントをもらった」、「国際的な研究者が集まりレベルの高さを感じて励みになった」、「英語コミュニケーションスキル・発表スキルを磨く必要性を感じた」、「自信が得られた」、「議論を楽しむことができた」など、いずれの採択者にとっても非常によいチャンスとなったようです。(清水夏樹)



講義紹介：森里海国際貢献学

森里海連環学教育プログラムの必修科目の一つが、『森里海国際貢献学』です。本科目の受講生は、ユニットの教員4名がそれぞれ主催するグループのいずれかに所属し、各グループにおいて英語での発表や討論（セミナー）を行います。本号では、4つのグループのうち2つについてその様子をご紹介します。

【グループ1：担当 横山・安佛】

グループ1のセミナーには地球環境学舎と農学研究科の学生9名が登録・履修しています。前期は、インターンシップに出かける学生にはその計画を、他の学生には研究成果や研究計画をスライドを使って説明してもらいました。たとえば、Ekanijatiさんはインドネシアでの陸水環境保全への取り組みを紹介し、湖沼流域の統合管理を目的とする公益財団法人において琵琶湖の環境保全策を学びたいとの抱負を熱く語りました。西田君は尿尿浄化槽、坂口君は河川の水質管理に関するいずれもベトナムでのインターンシップ計画を発表しました。枝松君は昨年インターンシップに行った企業で学んだ籾殻の薫炭とバイオ燃料の製法を紹介し、井上君も昨年カナダの大学で学んだ生態系モデルを若狭湾の生態系に応用する計画を発表しました。修士論文の課題として、三簾君は東日本大地震により生じた塩性湿地の動物相と環境について、黒澤君は文化財等の木材の内部を非破壊で検査する手法について、渡邊さんは日本の林業を経済的に成立させるシステム開発についての研究計画を説明しました。また、熊野古道の保全を博士論文のテーマとする中国人留学生 Gouさんはこの歴史的な文化遺産を守るには何が必要か、これまでの現地調査をもとに解説してくれました。このように本セミナーは、水環境を含むさまざまなフィールドの課題に取り組み、その結果をまとめ、発表する学生の能力を向上させることを目指しています。

履修生はすべて、英語を母国語としていませんが、全員、英語でレジメ作成、プレゼンテーション、ディスカッションをしました。学生の多くは当初、言いたいことをすぐに表現できないもどかしさを感じていたようですが、意見交換が活発になるにつれ和やかな雰囲気となり、セミナー終了後も話に花が咲く光景をよく目にしました。

(横山 壽)



【グループ4：担当 吉積】

グループ4には、17名の学生が参加しています。学生の所属研究科は、工学研究科（建築学）、農学研究科（森林科学と地域環境科学）、公共政策、そして地球環境学舎と様々です。研究の専門も環境工学から、建築、環境政策、地域資源計画、景観生態保全、国際協力、農学、公共政策学、環境教育と多様な研究を専門としている学生が参加していることから、色んな専門分野の視点からのするどい意見が出ていて、質疑応答は毎回刺激的なものになっています。特に、ペルー、中国、ベトナムなどの留学生も参加していることから、留学生の積極的な質問に感化され、活発な議論が毎回展開されました。グループに参加している学生のインターン研修先は、ベトナム、中国、フィリピン、スリランカ、バングラデシュ、イギリス、ドイツなど、海外でインターン研修を計画している人が多く、それぞれの研究分野をベースとした森里海連環学による国際貢献の方法も国の状況や国民性の違いによって異なることなどが議論されました。

インターンシップの内容として、コミュニティ防災の普及、持続可能な発展のための教育（ESD）プログラムの構築、防災建築、衛生教育プログラムの開発、水質改善、伝統的文化保全、生態系保全政策など、様々な活動内容ですが、森里海連環学を通じた国際貢献を進めるうえで重なる課題として、国際貢献の活動をどう評価するかという論点について特に議論が盛り上がりました。

（吉積巳貴）



お知らせ

- 京都大学・日本財団森里海シンポジウム
『人と自然のつながり』を育てる地域の力ー淡海発・企業の挑戦ーが12月14日（日）に開催されます。
詳しくはこちら
→<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/cohho/activities/20141214.html>
- 次回の森里海 NEWS LETTER No.4 の発行は、2015年3月頃を予定しています。

京都大学・日本財団 森里海シンポジウム
「人と自然のつながり」を育てる地域の力ー淡海発・企業の挑戦ー

日時 2014年12月14日（日）
13:00-17:00（開場：12:30）

講演者
高田純子（前・京都府知事）
『人と自然のつながり』を活かす東海部の企業活動を淡海からー研究発表を通して実現したいことー

特別報告
たねや農機（淡路町）
コウエ工業（新宮町）
淡路銀行（淡路町）

森里海連環学からみる企業の企業活動
『淡海発のつながり』出版編集（京都大学国際環境政策教育ユニット）
『企業活動と環境』（佐野重（京都大学大学院環境政策学））
『森林・山と環境』（高田純子（京都大学大学院環境政策学））
『森のつくりかた』（高田純子）

『森里海連環学』を通して「ものづくり」を「つくり」を「つくる」につなぐ
（パネリスト：高田純子、淡路町、新宮町、淡路銀行、たねや農機）
コーディネーター：高田純子（京都大学国際環境政策教育ユニット）

参加方法
参加無料
定員 先着200名
※定員になり次第
締切らせていただきます。
お席の都合上、希望がなくても
参加申込みをお断りしております。
<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/cohho/activities/20141214.html>

会場 キャンパスプラザ京都
5階第1講義室

【主催】 京都大学（国際環境政策教育ユニット）・フォーラム（経済学研究センター）・国際環境政策・学舎・森里海連環学
【協賛】 淡路町、新宮町、淡路銀行、たねや農機
【お問い合わせ】 森里海連環学事務局（国際環境政策センター）国際環境政策教育ユニット
Email: cohho@fserc.kyoto-u.ac.jp
TEL: 075-753-6426

【後援】 京都府、京都府環境政策推進センター、京都府環境政策推進センター、京都府環境政策推進センター、京都府環境政策推進センター

2014年度 英語スキルアップ講座（前期4クラス）

昨年度希望者が多く、くじ引きでの受講者決定となってしまったため、2014年度は英語スキルアップ講座のクラス数を増やし、前期には、プレゼンテーション&ディスカッションコースを2クラス（1クラス6名）を2クラス、発話を中心とした英語基礎力アップコース（1クラス10名）を2クラス、開講しました。

必修科目「森里海国際貢献学」や国際学会等での発表のために希望の多かった「プレゼンテーション&ディスカッション」のコースは今年度初めての開講です。

各コースの受講希望者に対して Lavergne 講師が面接し、TOEIC・TOEFL・英検などの点数も考慮して英語レベル別にクラスを分けて実施しました。面接は、他の学生も集まっている中で一人一人 Lavergne 講師の「あなたの専門は?」、「趣味は?」などの質問に自由に答える形で行いました。各クラスのレベルをできるだけ合わせるための試みでしたが、参加者は、なかなか言葉がみつからず緊張した面持ちでした。

各コースは全7回、学外の英語専門講師により開講されました。プレゼンテーション&ディスカッションコースでは、初回にプレゼンテーションの要素や必要な準備について解説を受け、次回から毎回、受講生が一般的なトピックを各自選んでプレゼンテーションを行い、自らディスカッションを運営しました。英語基礎力アップコースは、質問や会話など、発話を中心としたコースです。いずれも、スムーズなコミュニケーションが始まるまで少し時間がかかったようですが、「参加しやすい雰囲気だった」、「質問がしやすい」、「とても充実した内容で参考になった」など、受講した学生の満足度は高いものでした。また、コース終了後には、講師から受講生ひとりひとりに対して評価・アドバイスシートが届けられています。

（清水夏樹）



発行

京都大学 学際融合教育研究推進センター
森里海連環学教育ユニット

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学フィールド科学教育研究センター内
<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/cohho/>

